



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	平成22年度の国際教養の取り組み(fulltext)
Author(s)	秋山,寿彦; 古家,正暢; 山根,正博; 山本,勝治
Citation	国際中等教育研究 : 東京学芸大学附属国際中等教育学校 研究紀要(5): 125-132
Issue Date	2012-03
URL	http://hdl.handle.net/2309/130556
Publisher	東京学芸大学附属国際中等教育学校
Rights	

平成22年度の国際教養の取り組み

国際教養委員会 秋山寿彦 古家正暢 山根正博 (山本勝治)

第1学年(4回生)の「国際教養」実践報告

本紀要収録の 山本勝治 「まちづくり」について議論しよう！ 第1学年「国際教養」の授業実践報告 をご参照下さい。

第2学年(3回生)の「国際教養」実践報告

生徒一人一人が主体的に「豊かさ」を追求するESD～コミュニティーサービス活動を軸として～

ねらい

本実践は2010年度の第2学年(第4回生)の「国際教養」の記録をまとめたものである。生徒一人一人が学校や地域の様々な活動に参画し、「豊かさ」について多面的多角的にアプローチすることにより、持続可能な発展のための教育(ESD)という概念の形成・獲得を目指す。

ユネスコスクールであるとともに国際バカロレアミドルイヤーズプログラム(IBO・MYP)認定校である本校では、ESDを中核概念として、各教科・領域の学びの関連性を生徒一人一人が自分の個性や持ち味を生かすことができるコミュニティーサービス(地域貢献)活動を通して結びつけ、ホリスティックな学びの具現化を、めざしている。

実践内容

①「豊かさ」についてのイメージマップの作成と生徒による「豊かさ」の追求

「豊かさ」とは、何かということを経営記事のスクラップ活動に取り組むことから生徒一人一人が自分なりにとらえたことをイメージマップにまとめ、ミニワークショップを開催し、「豊かさ」を、人間の生き方やあり方を深く理解すること・国際的な視点からとらえること・科学や技術の視点からとらえるという3点からイメージの共有化を図った。そして、練馬区大泉学園ボランティアセンターの武石氏を講師に迎え「豊かさ」をボランティアの視点から考えた。

②自分が住むまちのフィールドワークを通して、「豊かさ」を具体的にとらえる。

「豊かさ」という視点からまちをとらえていくために、美術科との教科間連携を図り、アートをキーワードとしてまちづくりに取り組む丸の内エリアでのフィールドワークを、実施した。同時に、持続可能な農業生産の視点からパソナの野菜栽培のあり方に目を向けた。その後、生徒は自分が住むまちのよさや特色を、年齢構成・外国人の割合・都市開発・土地利用・歴史や文化・アート等に着目し、調査に取り組み、練馬まちづくりセンターの研究院の先生を講師に迎え、ポスターセッションを行った。

③「豊かさ」を追求することをテーマとするコミュニティーサービス(社会貢献)活動

- ・横浜市寿町での炊き出し及び福祉作業所訪問ボランティア
幕末の開港から始まる横浜は、国際都市であるとともにみなとみらい地区に代表されるように最先端都市でもある。同時に、そこで生活する路上生活者に注目した生徒を中心として炊き出しボランティア活動に参加した。
- ・東京学芸大学が企画・主催する難病を抱える人への理解と共生をテーマとする「ウォークラン フェスタ」との連携・参加
- ・「チーム 銀杏」

10月下旬から学校敷地内になる銀杏は多くの実を落とし、清掃に苦慮してきた。こうした用務担当の主事さんの作業の様子と呼び掛けに応答して、銀杏の実を収穫し、チャリティー販売し、コミュニティーサービスの活動資金としていこうとする活動に取り組んだ。2011年は、活動生徒の話し合いにより、ニュージーランド大地震への義捐金とされた。

<ボランティア活動>



Walk Run フェスタ



横浜・寿町 福祉作業所訪問

成果と課題

これまで、学校におけるボランティア活動は、生徒全員が一律に参加する奉仕的な活動という色彩が強くとともに教科学習との関連が十分には図られてはいなかった。本校の実践は、「豊かさ」をESDのキーワードとすることで社会科・理科・保健体育科・家庭科・美術科学習との連携を明確にすることが可能となった。また、2011年9月現在、新聞各紙に10名の意見投稿が掲載され、学習の社会的意味を生徒自身感じている。同時に、全体指導計画の整備が急務の課題となっている。

(文責：秋山寿彦)

第3学年(2回生)の「国際教養」実践報告

はじめに

本実践は2010年度の第3学年(第2回生)の「国際教養」の記録をまとめたものである。第3学年の「国際教養」は、以下のような4本の大きな柱立てのもと学習活動が行われた。

1. 沖縄の事前・事後指導を兼ねた『フィールドワーク』
2. 3泊4日の宿泊行事である『沖縄ワークキャンプ』
3. 沖縄の事前学習・中間発表・最終報告の3段階で実施された『Pre Personal Project (PPP)』
4. 職場体験としての『ジュニア・インターンシップ』

1. フィールドワーク

- (1) 0527 内閣府政策統括官（沖縄政策担当）＋朝日新聞東京本社（外岡秀俊編集委員）訪問
沖縄ワークキャンプの事前学習として沖縄に関する専門家の講演を聞き、今後のワークキャンプの基礎とする目的で実施した。

内閣府では、かりゆしウェアを着た内閣府の官僚から沖縄の概要・総論を聞いた。具体的には、沖縄史・米軍基地・観光と環境問題・沖縄の現状等を、スライドを使用した丁寧な説明を受けた。また、朝日新聞では、外岡編集委員から、国内の米軍基地の74%が沖縄に集中し、嘉手納市の面積の80%以上を基地が占める「基地の中に沖縄がある」現状を聞いた。普天間基地移設問題では「沖縄が基地を引き受けてくれて日本の平和が成り立ってきたということをお忘れしないで、自分の問題として考えてほしい」と強調された。

どちらの講演後も質疑はたいへん活発であった。「日米安保条約の解消の条件は?」「普天間基地を県内外に移設するときの問題点は?」「相手の立場に立った視点を持つにはどうすればいい?」等々。時間が過ぎても大勢の生徒が質問攻めにする光景も見られた。

- (2) 1216<理数探究><国際理解><人間理解>の3コースに分かれてのフィールドワーク
<理数探究コース> 葛西臨海水族園

沖縄サンゴ村訪問で、新たに生まれた疑問を解決するために訪れた。事前に葛西臨海水族園の係の方に質問事項をFAXするなどして、サンゴに関する学びの充実に努めた。

- <国際理解コース> JICA 横浜 海外移住資料館

海外移住の歴史を学ぶために訪問。特に沖縄からの海外移住者が多いということで、その歴史はもちろんのこと「入管法」改正に伴う人の移動の実態についても学んだ。

- <人間理解コース> 東京地方裁判所

裁判員制度の施行に伴う刑事裁判のしくみ・流れを学ぶために訪問。殺人未遂と傷害致死事件の裁判員裁判を傍聴後、第一東京弁護士会の弁護士さんから裁判の話聞いた。

2. 沖縄ワークキャンプ 1109～1112

Unit Question を『沖縄の諸課題に対し、私たちにできることは何か?』とし、日本における唯一の地上戦が繰り広げられた沖縄を訪ねることにより、平和を希求する心を育てること。「基地の島：沖縄」で生活する人々と直接対話する中で、『沖縄のころ（^{チムツクル}肝心）』（肝心＝人間の尊厳を何よりも重くみて、戦争につながる一切の行為を否定し、平和を求め、人間性の発露である文化をこよなく愛するころ）を知り、共に生きる決意をかためる契機とすること。そして、沖縄の自然「紺碧の空・群青の海」を五感をフル活動させる中で、持続可能な社会は、いかにあるべきかを考える機会とすることを目的に掲げて、沖縄修学旅行を実施した。

(1) 行程の概略

第1日 羽田空港 → 那覇空港 → 元ひめゆり学徒隊員による講演 → ひめゆり平和祈念資料館 → 平和の礎・平和祈念資料館 → 糸数壕・アンティラガマ

第2日 <人間理解><国際理解><理数探究>の3コースに分かれてのフィールドワーク

<人間理解コース> 金武町でのホームビジット (家業体験)

<国際理解コース> 読谷村チビチリガマ → 琉球大学 → 嘉数高台 (普天間基地)

<理数探究コース> 慶佐次マングローブ観察 → 読谷村「サンゴ畑」

第3日 グループ別タクシー行動

第4日 佐喜眞美術館 → 首里城公園 → 国際通り散策 → 那覇空港 → 羽田空港

(2) 事後アンケートの結果

A. 最も印象に残った訪問先は… (*どうしても一つに絞りきれない場合は複数回答可)

人間理解(41) 金武町ホームビジット: 30/41 糸数壕: 8

国際理解(26) チビチリガマの比嘉さんの話: 13/26 糸数壕: 4

理数探究(49) 慶佐次マングローブ&カヌー: 16/49 糸数壕: 14 美ら海: 4

B. 2日目のコース別学習に対する満足度は…

	人間理解(41)	国際理解(26)	理数探究(49)
おおいに満足した	35 (85%)	8 (31%)	14 (29%)
おおむね満足した	6 (15%)	17 (65%)	29 (59%)
少々不満だ	0	1 (4%)	6 (12%)
おおいに不満だ	0	0	0

C. 3日目のグループ別タクシー行動に対する満足度は…

ア おおいに満足した 70 (60%)

イ おおむね満足した 38 (33%)

ウ 少々不満だ 8 (7%)

エ おおいに不満だ

D. 沖縄ワークキャンプ全般に対する満足度は…

	人間理解(41)	国際理解(26)	理数探究(49)
おおいに満足した	23 (56%)	9 (29%)	13 (27%)
おおむね満足した	17 (41%)	15 (58%)	27 (55%)
少々不満だ	1 (2%)	2 (8%)	9 (18%)
おおいに不満だ	0	0	0

E. 沖縄ワークキャンプを一言で表現すると…

<人間理解> あたたかさ つながり ふれあい 心(くくる) 身近な異文化体験

<国際理解> 戦争と平和 戦争と基地 いのちの大切さ ゆいまーる

<理数探究> 自然との共存 感動 自然 いのち ゆいまーる 男女隔離

*a 事後の生徒の声・アンケートから言えることは<人間理解>の金武町ホームビジットと<国際理解>の比嘉涼子さんの講話が、大変強く印象に残ったようである。

*b 事後に沖縄ワークキャンプ新聞を作成し、お世話になった方々へ送付したのだが、お一

人の方から「…何気ない会話の中で交わされた言葉が、こういう形で届くとは思いませんでした。新聞の中には伝わっていないこと・抜けていることがあり、…私どもの意見は沖縄ではまだ理解されない方の数が圧倒的です…意見を言った者の立場をもう少しオブラートに包んで…」というご意見をいただきました。すぐに至らなかった点を正直に詫げる文書を作成し、送付したところ「生徒さんの沖縄への熱い気持ちや各家庭への感謝の心、金武町へまた来たいという思いの再確認もできました」と返信をいただきました。しかし今後、「〇〇さんは語った」という記事については、十分な配慮が必要であると痛感した。

3. Pre Personal Project (PPP)

(1) Pre Personal Project の位置づけ

MYP の最終学年である 4 年次に生徒は、「Personal Project」を作成しなければならない。そのための準備として、今年度「Pre Personal Project」と称し、沖縄ワークキャンプで学んだことを「プロセスジャーナル（研究過程を記した日誌）」・「作品」・「発表会での口頭発表」の 3 点をもって総括することとした。

(2) 「沖縄で学んだこと」の発表

Pre Personal Project の一環として、事前学習の中間発表は、スクールフェスティバル（学園祭）で一般の方を対象に、事後の「沖縄で学んだこと」の最終発表は、1 月中旬より各クラスにおいて保護者が参観する中、1 人 10 分（発表 8 分・質疑応答 2 分）の持ち時間で実施された。発表後、生徒の投票により各クラス上位 3 名を選出し学年発表会を行った。なお、最終発表前に生徒へ指示したことは、以下の 5 点である。

[発表に際し注意すべきこと]

- 学習の成果物（作品）
- MYP5 領域との関連（焦点をあてた相互作用のエリア）
- 作品制作へのアプローチ
- 作品制作時の困難および解決策
- 作品制作過程と作品についての自己評価

4. ジュニア・インターンシップ

(1) 事前学習

- ①キャリア研究（5 月） 「はたらく人のやりがい・みちのり Book」（河合塾編）講読
- ②キャリアワークショップ（7 月） 「仕事についての理解を深めていこう」 講師：保護者

(2) ジュニア・インターンシップ（7・8 月＋2 月）

- ・受入企業を捜すことが大変困難であった。多くの企業にとって、この不況の時代、中学生を受け入れる余裕はないと感じた。1 度の電話でつながることが少なく多くの時間を割かれる事業であったが、事後の生徒の感想を読むと有意義な教育活動であるように感じた。
- ・多くの企業は遠方のため郵送での御礼としたのだが、地元：大泉商店街を訪ねた折には、麦茶を入れていただいたり大変温かいおもてなしを受けた。基本はやはり御礼は訪問することであると思った。しかし、50 弱の事業所をすべて回ることは大変に厳しい。
- ・生徒に A4 ケント紙を手渡ししておき、活動報告として、写真を添付して、スクールフェス

イバルで展示すると良いと思った。そして、各企業へのお礼状の中にスクールフェスティバルの招待状を入れておくとも良いのではと思った。

(3) 次年度以降への申送事項

- ・夏休みの補習の日程調整を5月末に行う必要がある。補習とインターンシップが重なってしまう生徒が複数生まれた。受入事業所に迷惑はかけられないということで、補習を断念せざるを得ない生徒が生まれた。
- ・一生懸命なのは良いのだが、もう一日プラスして体験するという生徒が生じそうになった。学校へ相談してくれたので、保険に入っていない旨を話し了解してもらったが、事前に予定変更は不可であることを周知徹底すべきであった。

おわりに

2010年3月、国内ワークキャンプの候補地が沖縄に決定してから全てが動き始めた3学年の「国際教養」であった。準備不足の面が多々あったにもかかわらず、2回生の頑張りで『ワールドワーク』『沖縄ワークキャンプ』『Pre Personal Project (PPP)』『ジュニア・インターンシップ』を成功裡に終了することができた。改めて2回生の努力に感謝したい。また、ジュニア・インターンシップにあっては、受入事業所捜しで困難を極めている折、保護者の協力なくしては、年度内全員実施は不可能であったと思う。心より感謝申し上げたい。

(文責：古家正暢)

第4学年(1回生)の「国際教養」実践報告

はじめに

本報告は2010年度の第4学年(第1回生)の「国際教養」の記録をまとめたものである。本校はIBのMYPに取り組んでいるのだが、第4学年はMYPの最終学年にあたる。MYPの最終学年にはPersonal Projectという活動が組み込まれており、この活動を取り込みつつ、4学年の活動を展開した。

パーソナルプロジェクトについて

パーソナルプロジェクトは、名称を見る限りでは国内の学校でこれまで行われてきた「課題研究」「個人研究」「卒業研究」といったものと類似した取り組みであるような印象を与えることだろう。もちろん個々の生徒が課題を設定して取り組む活動であり、「課題研究」「個人研究」といった取り組みと非常に近い側面も持っているが、MYPの理念が色濃く出ている部分もある。一般的にイメージする「個人研究」との違いをまず生徒に認識させる必要があった。以下に本校が生徒に配布しているパーソナルプロジェクトのガイドから一部を引用してみる。

パーソナルプロジェクトは、MYPにおいてとても大事な位置をしめています。従って、相互作用のエリア(AOI)に関わった論点やテーマが明確なプロジェクトでなくてはなりません。

このプロジェクトは、長期間にわたって取り組む必要があります。だからこそ、あなたが本当にやりたいことである必要があるのです。

あなたのパーソナルプロジェクトは、以下の条件を満たしていなくてはなりません。

- ・ 1年間かけて取り組むにふさわしい明確で到達可能なゴールがあること。
- ・ 学習の姿勢（ATL）に加えて、少なくとも1つ以上の相互作用のエリア（AOI）に焦点をあてていること。
- ・ あなたの考えや意思に基づくものであること。
- ・ あなたの興味関心、趣味、特技や問題意識を反映したものであること。
- ・ あなたが取り組みたい分野や領域に関連していること。
- ・ あなた自身のオリジナルのプロジェクトであること。

あなたのパーソナルプロジェクトは、以下のようなものであってはいけません。

- ・ 成績がつけられる教科学習の一部であるもの。
- ・ あなたの社会生活や学習に支障をきたすものであるもの。
- ・ 特定の教科と密接に関わりすぎているもの。

生徒に説明する前に、我々教員が意識を改める必要があったのは言うまでもない。既存の課題研究の考え方から見ると、「特定の教科と密接に関わりすぎているものはいけない」という項目には違和感を覚えるし、「1つ以上の相互作用のエリア（AOI）に焦点をあてていること」という項目については、どのように対処すればいいのか見当もつかないはずだ。また、上記の引用の中には入っていないが、プロジェクトについての振り返り（取り組み後だけでなく取り組みの最中の振り返りも含む）が非常に重視されているのもMYPの特徴であろうと思われる。まず指導する教員が、IBの示すパーソナルプロジェクトの例とその例についての評価を学習した。4月当初、生徒たちを同じ作業に組みませ、その後個々の生徒に課題設定を行わせた。生徒が設定した課題の中から、パーソナルプロジェクトの特徴の一つである、「1つ以上の相互作用のエリア（AOI）に焦点をあてていること」という項目を強く意識した課題を例示するならば、以下のようなものがある（ちなみにAOIとは、「学習の姿勢」、「多様な環境」、「健康と社会教育」、「コミュニティと奉仕」、「人間の創造性」の5つの領域を指す）。

設定課題例

発展途上国へ手作り絵本の寄付

お菓子作りの化学～化学の面白さを伝える

表現、遊びのデジタル

冷蔵庫の無駄をなくすQRコード

私たちはどのように異常気象と向き合うべきなのか？

イギリスの中高生は日本の中高生と好きなものは同じか？

”正義の味方”は誰か（日本の刑事裁判）

日本人の間における「普通」という基準の違い

生徒の設定課題を集約するとともに、プロジェクトの進行の監督を行う教員（スーパーバイザ

一) の割り振りを行った。プロジェクトにおける教員の立ち位置も日本にはあまりなじみのないものであり、生徒のプロジェクトについて専門的な知識を持ち合わせていない教員がスーパーバイザーとなってもいっこうにかまわず、教員は主としてプロジェクト進行の監督者として、生徒に向き合うようになっている。2010年度は21人の教員がスーパーバイザーとなり、一人あたり5、6名の生徒の監督を担当した。スーパーバイザー決定後、生徒はプロジェクトへの取り組みを開始する。年度当初からのパーソナルプロジェクトの流れは以下ようになった。(5月のスーパーバイザー決定以後の展開は個々の生徒により千差万別なので、詳述しない。)

- 4月 パーソナルプロジェクトのよい例とその評価について
パーソナルプロジェクトの課題設定
- 5月 スーパーバイザー決定
- 9月 スクールフェスティバルで中間発表(希望者のみ)
- 1月 パーソナルプロジェクト提出
・作品(論文、芸術作品、実験や観察など)、報告レポートを提出する。
- 3月 パーソナルプロジェクト発表会(下級生と保護者も見学する)
(2010年度は東日本大震災の影響もあり2011年4月に延期して実施した。)

おわりに

パーソナルプロジェクト発表会について、2011年度に取り組むことになる学年(2回生)が感想を書かせていたのだが、その中に以下のような感想があった。

1つ1つの過程にどれくらいの時間がかかるのかを考えて計画を立てようと思った。私の今考えているPPは作品の制作にかなり時間がかかるものなので、特にそう思った。今回の先輩の発表などを参考に1つ1つの工程にかかる時間を割り出し、しめきりの時期から逆算して、しっかりとした現実的な計画を立てたいと思った。内容としては、自分の考えるプロジェクトを実行することによって他者や社会にどのような影響を与えることができるのかということをよく考えてプロジェクトをすすめていきたいと思った。

従来型の課題研究との差が、この感想で二点指摘されている。最終的な提出物だけでなく、その過程に対して強く意識を持つこと、またプロジェクトを通して何らかの作品を仕上げることでなく、そのプロジェクトが他者や社会にどのような影響を与えることができるのかということ意識することの二点である。この二点が従来型の課題研究との差の全てではないが、実施初年度として、明確に見えてきた差であることは間違いない。残念なのは、上記のような感想が多くの生徒から出てきたわけではないということである。今後もMYP認定校としてPPに取り組んでいくのであれば、PPという課題の特性について生徒への意識付けをはかるとともに、上記の二点について、具体的な取組の道筋を生徒に例示できるようになっていく必要があるかもしれない。

(文責：山根正博)